

話題の切り出しから「誘い」の意志決定に至るまでの 一連の言語行動

—中国語母語話者と日本語母語話者の比較—

黄 明 淑

1. はじめに

社会のグローバル化・国際化とともに異文化コミュニケーションは身近なものになってきた。また、近年では日本における留学生受け入れの推進や中日の経済協力などによって、中国と日本の密接な人的ネットワークの形成、交流活動はますます活発になっている。このように、国際交流が大きな課題となっている現代社会では、異文化コミュニケーションの重要性は増す一方である。しかし一方で、どの社会でもその中で守るべき規範があり、そのルールの上に社会が成り立っている。そのため、異文化間コミュニケーションにおいては、互いに歴史的、文化的、言語的に相違があることにより、時として誤解や不信が芽生え、ミスコミュニケーションが生じる可能性があると考えられる。Bateson & Bateson (1987, 日本語訳: 星川・吉福) は、「ダブルバインド (double bind, 二重拘束)」という概念を用いてこのような現象について説明している。「ダブルバインド」とは、「感情的に重要性をもった関係の中で、異なった理論的レベルに属するメッセージ間に当事者の気づかない矛盾があるようなコンテキストでのコミュニケーション」のことである。例えば、中国人の言語や行動が日本人からは矛盾しているように見えたとしても、中国人自身にとっては全く矛盾しない、一貫した言語行動として捉えられているような場合のことを指す。

このような背景のもと、本研究では言語行動のうち「誘い」⁽¹⁾に焦点を当てる。誰かを誘うあるいは誰かに誘われる行為は人間社会で普遍的に見られる現象であり、人間関係を構成する重要な行為であると考えられる。本研究では話題の切り出しから「誘い」の意志決定に至るまでの一連の言語行動に着目して、誘う側と誘われる側の両者がどのように誘いに関する話題を切り出し、どのように話題を展開していくのかを分析する。このような分析を通して、「誘い」談話はどんな要素から成り立っており、その全体像はどのような様相かを明らかにしていきたい。さらに、使用言語によって談話の展開にどのような特徴が見られるのかを明らかにするために、中国語母語話者 (以下CNS) と日本語母語話者 (以下JNS) の言語行動を比較する。また、「誘い」の参加者がどのような発話を用いてどのようにやりとりを行っているのかを実際の談話データから分析する必要があると考え、ロールプレイから得られた「誘い」談話をデータとして用いる。このように、言語行動の相違点を明らかにすることにより、中国と日本の両文化におけるコミュニケーション・スタイルをより深く理解することができ、さらに両者の異文化間におけるミスコミュニケーションが軽減され、誤解を防ぐ基礎となると考える。

2. 先行研究

「誘い」⁽¹⁾に関する先行研究は大きく「誘い」そのものによる研究（ザトラウスキー 1993；筒井 2002；鈴木 2003；鄭 2009など）と「誘い」における「断り」研究（藤森 1996；西村 2007など）の2種類に分けられる。「断り」に関しては、膨大な研究がなされ、その研究知見も蓄積されてきた。両者の位置付けに関して言えば、「誘い」は「断り」の付属物として取り扱われることが多かった。本研究では「誘い」そのものに着目するため、ここでは「誘い」における「断り」には触れないことにする。

2.1 「誘い」の構造に着目した研究

鈴木（2003）は、日本語教科書における勧誘の扱いの問題点を指摘し、勧誘の発話や構造が具体的な状況とどのように関係するかを知るためには、発話・談話・言語行動という三つのレベルに分けて分析する必要があると指摘した。また、勧誘の談話構造として筒井（2002）が提案した〈勧誘〉と〈相談〉を踏まえて、〈相談〉をさらに〈勧誘の内容に関する相談〉と〈実行の手続きに関する相談〉に分類できると指摘している。しかしながら、鈴木（2003）では複数の日本語教科書における勧誘の会話例をもとに検討がなされており、実際の会話ではどのようなしくみになっているのかという点は明らかにされていない。

「誘い」談話のもう一つの構造として、黄（2011）は「先行部」「誘い部」「終結部」の三つの部分に分類し、誘い部における「共同行為要求」について分析した。その結果、まず「共同行為要求」の全体的使用頻度において、CNSがJNSより多いことが明らかになった。次に、「共同行為要求」の種類別の使用頻度において、CNSが「自分の意向を述べる」を多用しているのに対して、JNSは「相手の意向を尋ねる」を多用していることが明らかになった。最後に、「共同行為要求」の出現パターンや出現順序において、CNSが「情報提供+共同行為要求」や「共同行為要求」の連続出現のパターンを多用する傾向があるのに対して、JNSは「気配り発話+共同行為要求」のパターンを多用する傾向があることが示唆された。

2.2 「意味公式」に着目した研究

鄭（2009）は、DCT（談話完成テスト）による日韓の勧誘ストラテジーを量的に分析した。その結果、日本語母語話者については「もしご都合がよろしければ」などといった「気配り発話」が多いことや「今日夕飯でも一緒にどう？」などといった相手の「意向」を尋ねる表現を多用していること、さらに意味公式の使用順序に見られた特徴から、ネガティブ・ポライトネス・ストラテジー重視の傾向が強いと指摘している。また、韓国語母語話者については、挨拶や相手への呼びかけや相手の近況を尋ねる前置きが多用されること、相手のことをほめる発話が多いこと、「Aさんと一緒にいきたいよ」などといった自分の「希望」を示す表現が多用されていること、そして意味公式の使用順序に見られた特徴から、ポジティブ・ポライトネス・ストラテジー重視の傾向が強いと指摘している。鄭（2009）は談話の分析単位として「意味公式」を提案している。鄭（2009）の研究により、「意味公式」の分析観点からの「誘い」の特徴が解明できたと言える。しかし、「意味公式」の分析単位では「発話」などの小さい単位での特徴が説明できるが、それより大きい単位での談話展開のパターンについては説明しきれないといった問題点が挙げられる。したがって、「意味公式」より大きな会話の単位、つまり「話段」を設定する必要があると考える。

2.3 「話段」に着目した研究

言語行動に関する研究で「話段」に着目した研究には、「誘い」を取り上げたザトラウスキー（1993）や高澤（2004）、および依頼を取り上げた池田裕・三好理英子・浅井尚子・章突（2000）が挙げられる。

ザトラウスキー（1993）は、日本語教育における文法中心の教授方法に対して、実際の話し言葉の分析に基づく談話型を教える必要があることを主張し、電話の自然会話による勧誘の分析を行った。その際、分析の枠組みとして「話段」を援用し、談話の連鎖ごとに詳細な分析を行っている。分析の結果、勧誘の発話の前に先行発話の話段が多く見られることや承諾された場合はその勧誘の行為に関する相談が行われること、勧誘が断れた場合は代案の話段が現れることが多いことなど、勧誘の会話の構造が明らかになった。この研究は自然会話を用いた点、勧誘者と被勧誘者の両者の観点から分析している点に意義があると言える。しかしながら、ここで用いられているデータは友人同士や先輩と後輩、知らない人など属性が統一されていないことや、勧誘の内容もプール、お茶会、ハワイ旅行など場面が様々であることから、勧誘に関する全体像を掴むのが難しいと考える。また質的分析による会話ごとの定性的分析が中心で、全体の使用傾向を導き出すものではない。

高澤（2004）は、先生・先輩・友人を誘う場面において、日本語学習者と日本語母語話者は誘い主体としてどのように誘い表現の「展開」、「表現形式」を使い分けているのかを待遇コミュニケーションの観点から分析した。その結果、1)日本語学習者は先生・先輩・友人を誘う三場面において、前置きとして「最近の話題」を使っているが、日本語母語話者は「親しい」友人にだけ「最近の話題」を使っていること。2)表現方法として「言いさし」が先生・先輩・友人を誘う三場面で使われており、特に日本語母語話者に多用されていること。3)「先生」を誘う場合、日本語学習者は「希望型」「勧め型」「依頼型」など間接表現を使っているが、日本語母語話者は「希望型」を多用していることが示唆された。しかし、高澤（2004）では「誘い」表現の展開の厳密な認定方法について詳述していないため、分析の枠組が明確でないという問題点が挙げられる。

池田他（2000）は、談話の開始から依頼に至るまでを一つの依頼行動とみなし、それを大きく「開始部分」と「依頼部分」の二つに分類した。さらに、「開始部分」に含まれる発話機能を「呼びかけ」「挨拶」「自己紹介」の三つに、「依頼部分」を「内容表示」「情報提供」「配慮」「主依頼」の四つに分類している。その結果、「依頼部分」の発話機能の出現順序において、JNSは「内容表示」→「情報提供」→「主依頼」の順で構成されているのに対し、一部のCNSは「主依頼」→「情報提供」の順になると指摘している。本研究では池田他（2000）を参考に、話題の切り出しから誘いの意思決定に至るまでの一連の言語行動を一つの「誘い」行動とみなし、それを大きく「先行部」と「誘い部」の二つに分類する。また「誘い」談話の全体像を明らかにするため、「誘い」談話をそれぞれの内容によっていくつかの「話段」に分類し、各話段にはどのようなストラテジーが用いられているかについて分析する。

「誘い」はわれわれの日常生活で頻繁に行われる行為であるが、その分析対象は「誘い」そのものの研究というより、「誘い」の言語行動に伴う承諾や断り表現の研究（吉田 2010；藤森 1996；生駒・志村 1993など）が中心であり、「誘い」の話題の切り出しから意思決定に至るまでの一連の言語行動に焦点を当てた研究は管見の限り見当たらない。

次に、調査方法ではザトラウスキー（1993）の電話による会話と鄭（2009）のDCTによるもの、鈴木（2003）の日本語教科書による分析などが挙げられる。本研究では鈴木（2003）の指摘に基づき、談話レベルでの分析を試みるため、実際の会話により近いデータの収集法としてロールプレイを採用する。最も

自然な談話のデータを入手するためには、実際の自然会話を調査対象とするのが一番であろうが、日常会話の中から「誘い」の談話のデータを収集するのは容易なことではない。ひいては手間をかけて収集したとしても、「誘い」の内容や場面、上下・親疎関係など様々な要素の影響を受けやすいため、分析が難しいと考えられる。また、定量の談話のデータを収集することを目的とした研究で、効率を上げ、研究の生産性を高めるためには、ロールプレイのほうが相応しい調査方法であると考えられる。ロールプレイは架空の設定で行われたものではあるが、DCTのように決められる会話文にあてはまるような発話を考えて作られたものではなく、実際誘う側と誘われる側の両者のやりとりによって作り上げたものであることから、即興性があり、自然会話と同様に場や相手の影響を受けるという点でも、DCTより実際の会話に近いと言えるだろう。

また、対照研究では韓国語と日本語（鄭 2009）、英語と日本語（ザトラウスキー 1993）を比較したものが中心で、談話レベルの視点から「誘い」を分析した中日対照研究は管見の限り見当たらない。その他には、誘う側もしくは誘われる側の片方だけに焦点を当てた研究が挙げられる（鄭 2009、ザトラウスキー 1993など）。「誘い」行動は誘うという目的を達成するために誘う側と誘われる側の間で行われるやりとりであると言えるが、鈴木（2003：117）が指摘しているように、「誘い」の言語行動は「A：ねえ、コーヒー、飲もうよ」―「B：うん、飲もうか」（勧誘―承諾）といった、単純な発話交換だけで成り立つとは限らない。実際の「誘い」のコミュニケーションでは、単純なものから複雑なものまで様々なパリエーションがあり、談話の展開パターンもそれぞれ異なると考える。本研究では「誘い」談話の全体像を捉えるために「話段」という分析単位を用い、誘う側と誘われる側両者のやりとりに焦点を当てて分析を試みる。

3. 研究目的と研究課題

本研究では話題の切り出しから「誘い」の意思決定に至るまでの一連の言語行動に焦点を当て、誘う側と誘われる側がどのように話題を切り出し、話題を展開していくかを分析することを通して、CNSとJNSにおける「誘い」談話の全体像を明らかにすることを目的とする。その結果から得られた知見から、CNSとJNSのそれぞれの言語行動の特徴と差異を見出し、両者のコミュニケーション・スタイルを明らかにしたい。以上のことを踏まえて、以下のような研究課題を設定する。

課題1 「誘い」談話の先行部において、CNSとJNSの先行連鎖の使用状況にはどのような特徴が見られるか。

1-1 CNSとJNSで使用された先行部の先行連鎖の有無にはどのような特徴が見られるか。

1-2 CNSとJNSの先行部の先行連鎖の使用にはどのような特徴が見られるか。

課題2 「誘い」談話の誘い部において、CNSとJNSの話段の使用状況にはどのような特徴が見られるか。

2-1 CNSとJNSの誘い表現はどのようなものか。

2-2 CNSとJNSの誘い部の話段の使用にはどのような特徴が見られるか。

4. 調査方法

4.1 調査対象者

本調査は2011年3月から6月にかけて日本及び中国の大学で実施した。調査対象者は中国人ペア、日本人ペアそれぞれ35組、合計70組である。協力者は全員大学生（18歳～22歳）であり、その関係は同じ学年

の同じ授業やゼミ、サークルに所属している友人同士に限定した。両者の関係を友人関係に設定したのは以下の三つの理由による。まず、「誘い」はある程度の関係が築かれていなければ発生しにくいものであるということ。さらに、先輩、後輩などの上下関係や年齢の差が分析結果に及ぼす影響を避けるためであること。最後に、日ごろ接触している同じ大学の同じ学年あるいは同じサークルの仲間同士であれば一定の馴染みがあるため、比較的気軽にロールプレイ調査に参加することができると思ったことからである。

4.2 調査内容

本研究では、ロールプレイ会話を分析データとして用いる。ロールプレイの内容は、「食堂へ食事に誘う」といった場面に設定した。このトピックを設定した主な理由は、食事に誘ったり誘われたりして一緒に行動するという場面は、中国と日本の大学生が日常生活の中で遭遇する可能性が比較的高いと考えたからである。調査に当たって、日本語母語場面では日本語のロールカードを、中国語母語場面では中国語のロールカードを用いた。日本語版のロールカードは表1に示す通りである。

表1 本研究で用いたロールカード

A：授業が終わりました。あなたは友達の名前を誘って食堂と一緒にご飯を食べにいきたいと考えています。これからBさんを食事に誘ってください。
B：あなたは友達の名前からこれから一緒に食事にいこうと誘われました。Aさんと会話をしてください。

4.3 調査方法

会話データの収集は、ICレコーダーによる録音調査である。中国人対象者の調査は中国（大連）⁽²⁾で、日本人対象者の調査は日本（東京）で実施した。録音は協力者が気楽に話せる場所（教室、学生専用の控え室など）で行った。

次に、調査手順について述べる。調査に当たって、協力者にはまず誘う側と誘われる側の役割分担をしてもらった後、事前に用意したロールカードを配付し、内容を理解してもらう時間を取った。調査の参加に当たっては、ロールカードに書かれた内容が実際の生活で起きていることと想定した上で、できるだけ自然な会話をするように求めた。会話の時間は特に設定せず、誘いが終了した時点でできるだけ自然な形で会話を終了させるように口頭で指示をした。

4.4 データの収録方法と文字化

本研究ではICレコーダーで録音したCNS、JNS各35組のロールプレイデータを文字起こしし、分析データとして用いる。CNSとJNSのデータの文字起こしはいずれもとも筆者が行った。中国語から日本語への翻訳は筆者が行った後、中国人一名、日本人一名の協力を得て確認作業を行った。

5. 本研究の分析の枠組

5.1 本研究で扱っている「誘い」談話の構造について

本研究では黄（2011）、徐（2006）の構造を参考に、「誘い」談話を大きく「先行部」「誘い部」「終了部」の三つの部分に分類する。以下にそれぞれの定義を記す。

【先行部】：「誘い」談話において、「誘い」に入る前に前提条件を尋ねたり状況を説明したりする段階である。

【誘い部】：「誘い」の開始から内容の伝達、誘われる側の意志表示に至るまでの一連の言語行動を表す段階である。「誘いの明言」という「誘い表現」などによって開始され、日にちや場所など誘いの内容を巡る具体的なやり取りが展開される。また、場合によっては再勧誘が行われることもある。

【終結部】：「誘い」を終了させる部分で、待ち合わせの時間や場所や約束の内容に関する確認のやりとり、将来の約束などが表われたりする。

本研究では「誘い」の切り出しから意志決定に至るまでの一連の言語行動を分析対象とするため、「先行部」「誘い部」を中心に検討する。

5.2 分析単位

会話を分析するにはどのような単位でそれぞれの発話を区切るのかが問題になる。南（1972）は言語表現における「一つの仮定的単位」として、「談話」という単位を提案している。会話のもう一つの分析単位としてザトラウスキー（1993）は、南（1981）の「会話」と「談話」の下位単位として「話段」を設け、「一般に、談話の内部の発話の集合体（もしくは一発話）が内容上のまとまりをもったもので、それぞれの参加者の「談話」の目的によって相対的に他と区分される部分」と定義している（1993：72）。また、「話段」と「話題」の関係について柳（2012：49）は、依頼談話においては話し手が行う行為の目的による「話題」が第一基準になると述べている。さらに、依頼の目的に沿った話題について行われる一つのまとまりを持った発話の集合が一つの「話段」になると指摘し、実際の依頼の談話でどのような「話段」が見られるかを分析するためには「話題」を中心に認定すると指摘している。

本研究では、「誘い」談話の全体像の解明及び話題の連鎖ごとの特徴を把握するため、ザトラウスキーが提案した「話段」を分析単位として用いる。また、「話題」によって「誘い」談話から「話段」を抽出し、表2の分析の枠組を設定した。話題の命名に関しては、高澤（2004）、ザトラウスキー（1993）を参考にした。

表2 本研究の分析枠組

構造	話段名及び解釈	会 話 例	
		日本語	中国語
先行部	<都合伺い> 誘いの日時について相手に時間が取れるかを尋ねる	A: ~さん暇? B: 暇:	A: 中午有事儿吗? B: 没事儿啊
	<状況説明> 誘うきっかけになった状況を説明する	A: お腹空いためっちゃ B: 私もお腹空いた	A: 诶我天啊 终于下课了 饿死我了 B: 我也是 我也饿死了 我老饿了
	<条件確認> 誘う事柄についてその前提となる条件について尋ねる	A: お弁当持ってきた? B: 持ってきてない	A: 朱玉 你没吃饭呢吧? B: 还没有吃呢
	<条件提示> 誘う事柄についてその前提となる条件を提示する	A: おお やばい 超お腹減った B: お腹減ったね	該当例なし
	<注目要求> 相手の注意を喚起する発話のまとめり	A: ねねね B: うん:	該当例なし
誘い部	<誘い> 誘う側の「直接誘い」や「間接誘い」によって開始され、誘われる側の応答によって展開される話題のまとめり	A: なんか昼ごはん一緒に食べよう B: あ いいじゃん せっかくだから	A: 姜儿? 吃饭: 呗? B: 行啊?
	<情報交換> 場所・食べ物について情報提供や情報要求など誘う側と誘われる側の誘う側が誘われる側に一緒にいる行為を行うように働きかけ、誘いに関する事柄について合意形成を行う過程（「食堂へ食事に誘う」の場合、主に食べ物・場所を巡るやりとりが現れる）	A: えどこいく? あ食堂でいいか B: うん 食堂でいい A: え今日のメニューなんだろうね: B: 日替り定食 食べたい	A: 那去哪? h h B: 嗯: 去食堂: 吧 A: 行 1楼 2楼 3楼 还是地下 B: 嗯:: 2楼吧 我去吃: 三宝饭 你吃啥? A: 那我去吃: 粗粮细作吧 粗粮有益身(h)心(h)健(h)康
	<再誘い> さまざまな情報提供や情報要求の後、再び誘いを呼びかける発話のまとめりで、出現位置から見ると<誘い>話段の後になる。枠内は<再勧誘>の話段に対する会話例である。	A: お昼: 食: 堂行こう h h B: あ いいよいいよ 何今やってるかね 何フェアかね: 私最近: 食堂あんまり取らんつけ A: h h h B: h h [久しぶりじゃん A: [何だろう]でも そろそろ北海道フェアじゃない あれ クリスマス B: クリスマス ケーキがあるやつか A: うん ----- B: いいよいいよ 行こう行こう A: うん: ----- (一部省略)	A: 姜儿? 吃饭: 呗 B: 行啊 ----- A: 那走吧 [嗯] B: [走吧]? 去几楼? -----
	<情報補充> 誘い部において、誘う側と誘われる側のやりとりの過程に挿入される誘い内容と直接関係のない話題のまとめり ※枠内は<情報補充>の話段に対する会話例である。会話例から分かるようにAとBは食べ物の話から野菜の話へとシフトしていることが分かる。	A: ね 今日の日替わりなんだろうね B: ね [h h h] A: [h h h] あたし野菜食べたいな ----- A: え: なんか: やっぱ 一人暮らしてるとき: B: うん A: 野菜とらないよね: B: そうなんだよね: A: ね: -----	B: 啊我想吃饺子 吃饺子吧 好久没吃了 A: 饺子啊: 哎呀 我都: 想吃怎么办 要不 要不那什么吧 你吃饺子 我吃拉面正好咱俩那交换一下还有一个 多品尝一样儿 是吧? ----- A: 来 石头剪子布吧? B: 来吧 A: 一二三 我赢了 走吧 吃饺子 B: 好吧 我吃酸菜馅的 A: h h h h h 那我吃白菜馅的
	<恩恵表示> 相手に奢ることを求めたり、自ら奢ることを宣言すること	該当例なし	A: 你请客 怎么样? B: 对啊: 我请啊:

5.3 集計方法

本研究では話している内容、話題の計画意図などを基準とし、「誘い」談話から「話段」を抽出し、その意味的機能によってそれぞれのカテゴリーに分類した。「話段」の出現頻度とは、「先行部」と「誘い部」の中で「話段」の分析単位がどの程度使用されているかを集計したものである。具体的な集計方法については表3に示したとおりである。

表3 「話題」の集計方法

発話番号	発話者	発話内容	談話構造	話題名	
1	JNS 1	うん：(***) 暇：？	先行部	都合伺い	
2	JNS 2	暇：			
3	JNS 1	ご飯食べる？	誘い部	誘い	
4	JNS 2	食べる お腹空いた			
5	JNS 1	うん：			
6	JNS 2	うん：			
7	JNS 1	学食行く？			情報交換
8	JNS 1	行く			
9	JNS 2	ああ じゃあ行こう [h h h h]		再勧誘	
10	JNS 1	[うん h h]			
11	JNS 1	何食べる？		情報交換	
12	JNS 2	どうしよう：見て決める			
13	JNS 1	だよね			
14	JNS 2	うん			
15	JNS 1	うん じゃあ行こう			終結部
16	JNS 2	うん 行く			

6. 結果及び考察

6.1 研究課題1の結果

研究課題1では、「誘い」談話の先行部におけるCNSとJNSの先行連鎖の特徴について明らかにするため、課題1-1で先行部の有無について分析し、課題1-2で先行部の先行連鎖の使用状況について分析する。

6.1.1 先行部の有無に関する結果

研究課題1-1はCNSとJNSの先行部の有無に関する結果である。その結果を図1に示す。先行部の有無に関して、CNSは有りが7例、無しが28例であるのに対して、CNSは有りが27例、無しが8例見られた。

この結果からまず、全ての「誘い」の談話は必ずしも先行部を伴うわけではないことが示唆された。また、CNSはそれほど先行連鎖を用いず、比較的ストレートに誘いを切り出すことを好む傾向があることが示された。一方、JNSのほうは唐突に切り出すよりも、「誘い」と関連する先行の話題（先行連鎖）を

話題の切り出しから「誘い」の意志決定に至るまでの一連の言語行動

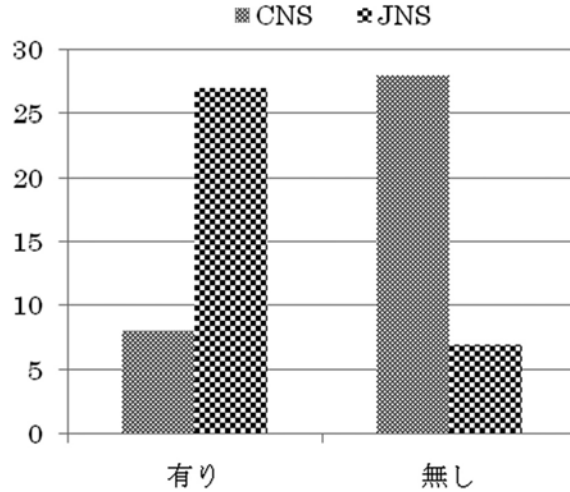


図1 CNSとJNSの先行部の使用回数(例)

会話例1 (日本語)

1 JNS 1 うん：(***) 暇：？	⇒	先行部あり
2 JNS 2 暇：		
3 JNS 1 ご飯食べる？		
4 JNS 2 食べる お腹空いた		
5 JNS 1 うん：		
6 JNS 2 うん：		

導入した後、誘いを切り出す傾向があることが示唆された。以下に会話例を示しながら説明する。

会話例1はJNS1とJNS2の「誘い」談話の先行部と誘い部におけるやりとりである。JNS1は誘う側でJNS2は誘われる側である。発話番号1-2は先行部の先行連鎖である。このように、JNSは先行部で先行連鎖を用いることによって「誘い」に入る前に前提条件として相手の都合を聞き、次第に誘い部

会話例2 (中国語)

161CNS 1 下(h) 课(h) 去(h) 吃(h) 饭：吧？(授業終わったら一緒にご飯行こう)
162CNS 2 好啊：(いいよ)
163CNS 1 去哪：吃饭？(どこ行って食べる？)
164CNS 2 食堂(食堂)

に移行していくことが窺える。

会話例2はCNS1とCNS2の「誘い」談話の誘い部におけるやりとりである。CNS1は誘う側でCNS2は誘われる側である。この会話例から分かるように、CNSは先行部を用いず、直接誘い部に入る傾向があることが考えられる。

6.1.2 先行連鎖の使用状況に関する結果

研究課題1-2では先行部に出現した先行連鎖の使用回数について調べる。先行連鎖について

Schegloff (2007:28) は、ある連鎖の前に来て「先行」と認識されるものを「先行連鎖」と指摘し、それはほかのものの前置きとしての機能を果たすと指摘している。

分析の結果、先行部においては「条件確認」「条件提示」「注目要求」「都合いい」「状況説明」の5つの先行連鎖が抽出された。詳細は図2に示すとおりである。先行連鎖において、CNSは「条件確認」が5組、「都合いい」が1組、「状況説明」が2組見られた。それに対して、JNSは「状況説明」が18組、「条件確認」が16組、「都合いい」が4組、「注目要求」が4組見られた。以上の結果から、JNSは先行部における先行連鎖として、「状況説明」と「条件確認」を多用する傾向があることが示唆された。

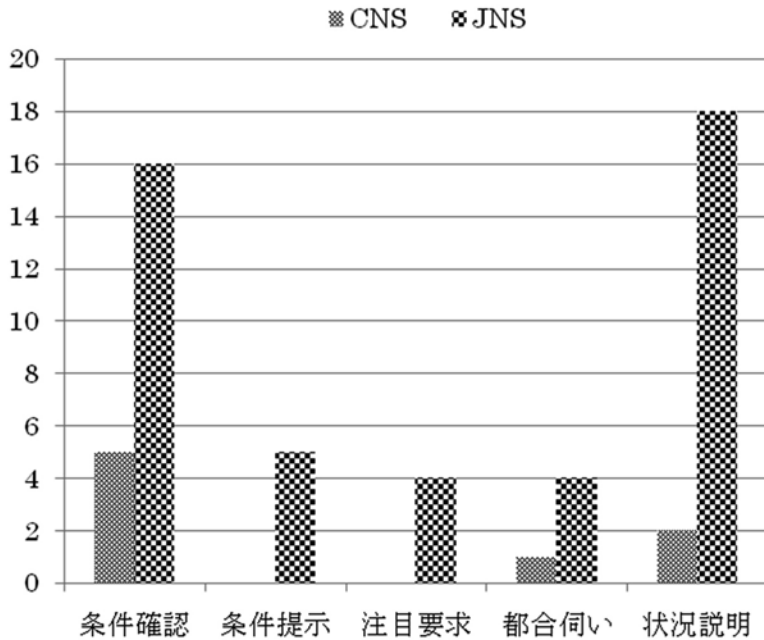


図2 CNSとJNSの先行連鎖の使用回数(例)

このような結果を踏まえて、CNSとJNSの先行部における先行連鎖の使用の特徴をまとめる。まず、CNSとJNSの共通点として「条件確認」を使用する傾向が見られた。また、先行連鎖の主なストラテジーとしてCNSは「条件確認」を用いる一方、JNSは「状況説明」「条件確認」を用いることが明らかになった。

6.2 研究課題2の結果

研究課題2では、CNSとJNSの「誘い」談話の誘い部における話段の使用の特徴について分析する。そのため、研究課題2-1では「誘い」表現について詳細に分析し、2-2では誘い部における話段の連鎖の使用状況を調べる。

6.2.1 誘い表現の発話率

「誘い」表現の使用状況を明らかにするため、本研究では「誘い」談話から「誘い」表現を抽出し命名した。その後、全体発話数から誘い部で用いられた「誘い」表現の発話数を抽出し、発話率を求めた。分析の結果、「誘い」表現は計5種類見られ、それぞれ「定型表現型」「前置き発話+定型表現型」「定型表現反復型」

表4 CNSとJNSの誘い表現の発話率 例 (%)

カテゴリー	会話例	CNS	JNS
前置き発話＋ 定型表現型	さあ／ねえ、～しない？	10 (28.6%)	15 (42.9%)
定型表現型	～しない／～ませんか？ ～しよう／～しましょうなど	12 (34.3%)	11 (31.4%)
定型表現反復型	～しない？～しよう	3 (8.6%)	1 (2.9%)
気配り発話＋ 定型表現型	もしよかったら、～しない？	0 (0%)	4 (11.4%)
情報提供＋ 定型表現型	授業終わったね 一緒にご飯食べに行こう	10 (28.6%)	3 (8.6%)
その他	行こうよ ご飯食べに	0 (0%)	1 (2.9%)
合計		35 (100%)	35 (100%)

「気配り発話＋定型表現型」「情報提供＋定型表現型」「その他」と命名した。まず、「誘い」表現において、「～しない／～ませんか？、～しよう／～しましょう」などのような定型表現を「定型表現型」；定型表現型の前に出現された要素が加わったものを「前置き発話＋定型表現型」；「ご飯行かない？一緒に行こう」のように定型表現が連続して出現する場合は「定型表現反復型」；「もしよかったら」などの要素が加わったものを「気配り発話＋定型表現型」；定型表現の前に情報の提供が見られた場合は「情報提供＋定型表現型」；「行こうよ ご飯食べに」のように定型表現と倒置型が使用されている場合は「その他」と命名した。表4にCNSとJNSの誘い部で現れた「誘い」表現の詳細を示す。

分析の結果、「前置き表現＋定型表現型」はCNSが10例、JNSが15例と比較的多く使用されていた。次に、「定型表現型」については、CNSが12例、JNSが11例見られた。「定型表現反復型」については、CNSが3例、JNSが1例見られ、「気配り発話＋定型表現型」については、CNSが0例、JNSが4例見られた。「情報提供＋定型表現型」については、CNSが10例、JNSが3例見られ、「その他」はJNSに1例のみ見られた。

Brown & Levinson (1987) は、円滑なコミュニケーションや円滑な人間関係を維持するための言語的なストラテジーを、ポジティブ・ポライトネスストラテジーとネガティブ・ポライトネスストラテジーの2つに分類している。ポジティブストラテジーとは、他人に理解されたい、好かれたい、賞賛されたい、他人に近づきたいというプラス方向への欲求であり、ネガティブストラテジーとは、他人に邪魔されたり、立ち入られたりされたくないという、マイナス方向に関わる欲求である。

分析の結果、「気配り発話＋定型表現型」はJNSのみに4例見られた。「誘い」という言語行動は相手に何らかの行動をするように求める行動であり、誘う側が相手を誘い、(誘いを受けた)誘われる側が行動を実行するには、両者にとって何らかの形で負担(時間や労力、心理的要因など)がかかることが考えられる。誘われる側が誘いを受諾し、誘いの行動が実行されれば、両者にとっては良い状況が生み出されることになるが、時に誘われる側の断りは不快な状況を生み出す恐れがある。両者はこのような可能性を十分認識した上で誘いのやりとりを遂行していく。それに先行し、誘う側は「もしよかったら」などといった言葉を添えた形で誘われる側への負担を軽減し、選択(受諾や断りなど)の余地を与えることで、相手への配慮を示す。このことからJNSの「気配り発話＋定型表現型」はネガティブ・ポライトネスストラテジーであると思われる。

それに対して、「情報提供+定型表現型」はCNSが10例、JNSが3例見られた。JNSが「気配り発話+定型表現型」と「前置き発話+定型表現型」を多用するのに対して、CNSは「情報提供+定型表現型」を多用する傾向が見られた。「授業が終わったね、ご飯食べに行こう」や「お腹空いた、ご飯食べに行こう」など、CNSは誘いの前に前提条件となる情報を提供することによって、誘いの必要性を相手に伝えていることが窺える。JNSの「気配り発話+定型表現型」がネガティブ・ポライトネス戦略である一方、CNSの「情報提供+定型表現型」はポジティブ・ポライトネス戦略であると言えるだろう。

なお、JNSでは先行部のやりとりを通じて前提条件の確認などが出現したが、CNSでは誘い表現の前触れとして情報提供が出現した。両者とも誘いの前提となる条件を伝えることは共通しているが、伝達の出現位置や内容に相違があることが示唆された。

6.2.2 話段の連鎖の使用状況に関する結果

研究課題2-2では誘い部の構成要素として、「話段」を抽出した。分析結果は図3に示すとおりである。CNSは「誘い」の話段が35例、「情報交換」の話段が40例、「情報補充」の話段が8例、「再誘い」の話段が7例見られた。それに対して、JNSは「誘い」の話段が35例でCNSと同様の結果となった。また、「情報交換」の話段が39例、「情報補充」の話段が18例見られた。以上のことからCNS、JNSとも「誘い」の話段と「情報交換」の話段、「再勧誘」の話段をほぼ同数で用いていることが明らかになった。さらに、「情報補充」の話段に関してはJNSのほうがCNSより使用頻度が高かった。一方、CNSでは「我请你吃吧(奢るから)」などと言った「恩恵表示」が見られたが、これらの要素はJNSには全く見られなかった。

課題2の結果で示されたように、CNS、JNSとも半数以上の対象者が「誘い」の話段、「情報交換」の話段を使用していることから、両者とも「誘い」の話段、「情報交換」の話段を基本型として用いている

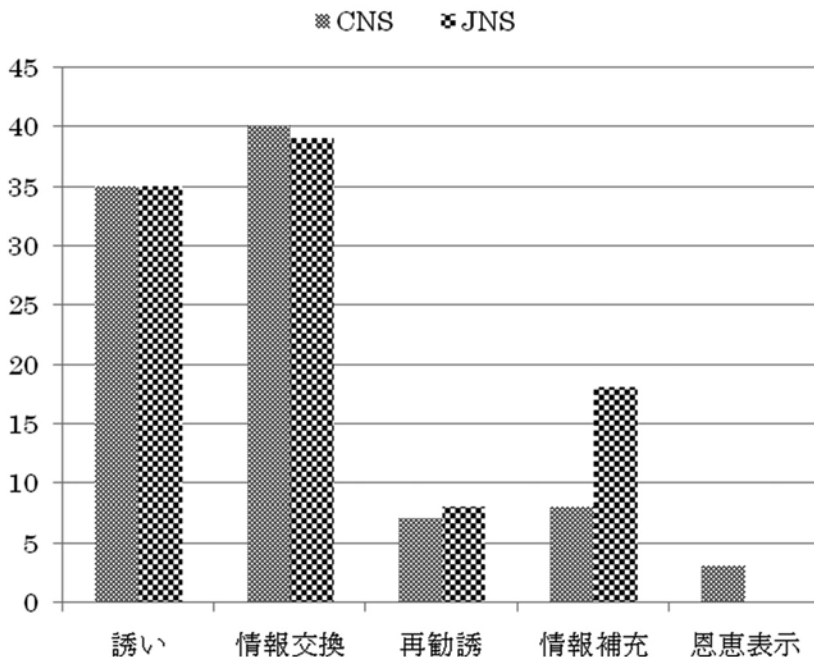


図3 CNSとJNSの「誘い部」における各話題の使用回数(組)

と言える。また、CNSには「恩恵表示」の話段、「再勧誘」の話段、「情報補充」の話段が見られ、JNSには「情報補充」の話段、「再勧誘」の話段が見られた。

7. まとめと今後の課題

本研究では、話題の切り出しから「誘い」の意志決定に至るまでの一連の言語行動に着目して、CNSとJNSの言語行動に見られる特徴と相違点を述べてきた。まず、課題1の結果から、JNSの「誘い」談話の先行部の先行連鎖には一定の規範があり、それが談話の展開パターンとして明らかであることが示唆された。JNSは「先行連鎖」を用いることによって相手に誘いの予告を伝達し、突然相手の領域に立ち入ることによってもたらす唐突感や不快感を解消しようという意図が窺えた。すなわち、JNSは先行部の段階を確実に踏まえながら対人関係を築いていくことが認められた。一方、CNSには先行部の段階が明確に踏まれない傾向があり、談話の展開パターンにおいてJNSと異なる言語行動を取っていることが窺える。依頼の言語行動でも先行連鎖に関する研究がなされており、日本語の依頼の談話構成の特徴として、依頼発話の前に協力要請の「前置き」や「予告」など依頼の前提となる情報のやり取りが行われていることが明らかになった(猪崎 2000a; 柏崎 1993など)。さらに、一部のCNSには先行連鎖のやりとりがなく、「主依頼」→「情報提供」の順に構成されると指摘している(池田他 2000)。「誘い」談話でも依頼行動と同様に、CNSに比べJNSのほうに先行部の多用が見られたことから、これは先行研究を支持する結果となった。

熊谷(2000:109)は言語行動には常に二つの指向性、すなわち、該当の言語行動の目的を効果的に達成したいという指向性と相手との対人関係を良好に保ちたいという指向性が併存すると指摘している。例えば、「誘い」の場合は相手を誘うことが目的達成になる。それと同時に、「誘い」が終了するまで相手と良好な人間関係を保ちながら言語行動を遂行していくことが求められる。しかしながら実際のコミュニケーションにおいては、相手(誘われる側)の反応は必ずしも誘う側の期待に比べられず、場合によって相手は「断り」や「保留」の意思を表したりする。そのため、両者は誘いの遂行過程で様々なストラテジーを用いて相手との対人関係維持に努める。

研究課題2では、CNS、JNSともに「誘い」の話段、「情報交換」の話段を基本型の展開パターンとしていることが示唆された。この結果から、誘う側と誘われる側は「誘い」の意図を伝えることから内容の伝達、意志決定に至るまで確実に「誘い」の目的を達成していくプロセスを踏まえていくことが窺える。すなわち、CNS、JNSともに「誘い」における「目的達成」という面では類似の傾向があることが窺える。しかし、その他にCNSとJNSには異なる話段の使用が見られ、「相手との良い関係維持」という側面においては異なる傾向が示唆された。CNSが「恩恵表示」の話段を用いることに対して、JNSには全く見られなかった。「恩恵表示」の主な表現方式は「相手に対する奢り」である。CNSは相手にとって有利になる条件を提示し、相手の興味を引き起こす話題を用いることによって、相手との対人関係維持に努めることが窺える。一方、CNSに比べJNSは「情報補充」の話段を多用する傾向が見られた。JNSは相手と「誘い」以外の共通の話題を互いに作り上げていくことで、「誘い」から感じる負担を軽減し、相手への負担と良い関係維持のバランスを取りつつ進めていることが窺えるが、これは「誘い」の遂行過程で現れた工夫と配慮へのストラテジーであると考えられる。メグリアングライ(2013)は言語行動の遂行過程には敬語の使用や言い回しなどが工夫の仕方として反映されると述べているが、本研究の「情報補充」も「相手との良い関係維持」のための一種のストラテジーであると考えられる。また、全体の出現位置の分布から見ても、

「誘い」話段の前後に先行連鎖、「情報補充」の話段の段階を踏まれていることから、常に相手の負担への配慮を測り、人間関係維持に努めることが示唆された。

研究課題2では、全ての談話においては必ずしも定型表現を用いることはなく、「気配り発語+定型表現型」や「情報提供+定型表現型」など、様々な表現形式が見られた。日本語教育の現場では「誘い」を指導する際に「～しよう／～しませんか？」などのような定型表現を用いて教える傾向が多いが、学習者に定型表現のみを示すことで誘いを指導するのは不十分であると考えられる。コミュニケーション能力を重視すべきとされている日本語教育では、学習者に単なる表現形式だけではなく適切な「コミュニケーション」の行動に合わせて言語表現の多様性を教えることも大切であると考えられる。

参考文献

- 猪崎保子 (2000a) 「「依頼」会話にみられる『優先体系』の文化的相違と期待のずれ」『日本語教育』104, 79-88.
- 柏崎秀子 (1993) 「話しかけ行動の談話分析－依頼・要求表現の実際を中心に－」『日本語教育』79, 53-63.
- 熊谷智子 (2000) 「言語行動分析の観点－「行動の仕方」を形づくる諸要素について－」『日本語科学』7, 95-113.
- 黄明淑 (2011) 「「誘い」表現における中日対照研究－共同行為要求に着目して－」『日本語／日本語教育』2, 137-153. ココ出版
- ザトラウスキー, ポリー (1993) 『日本語の談話の構造－勧誘のストラテジーの考察－』くろしお出版
- 徐孟鈴 (2006) 「依頼会話の【終結部】の考察－日本人・台湾人・台湾人上級学習者の接触場面のロールプレイヤーを比較して－」『言葉と文化』7, 67-84.
- 鄭在恩 (2009) 「日韓の勧誘ストラテジーについて」『言葉と文化』10, 113-132.
- 鈴木睦 (2003) 「コミュニケーションからみた勧誘のしくみ－日本語教育の視点から－」『社会言語科学』6-1, 112-121.
- 高澤信子 (2004) 「「誘い表現」における待遇表現指導について－先生・先輩・友人を誘う場合－」AJALT日本語研究誌2, 252-268.
- 筒井佐代 (2002) 「会話の構造分析と会話教育」『日本語・日本文化研究』(12), 9-21.
- 生駒知子・志村明彦 (1993) 「英語から日本語へのプラグマティック・トランスファー「断り」という二つの言語行為について」『日本語教育』79, 41-51.
- 西村史子 (2007) 「断りに用いられる言い訳の日英対照分析」『世界の日本語教育』7, 93-112.
- 熊谷智子 (2000) 「言語行動分析の観点－「行動の仕方」を形づくる諸要素について－」『日本語科学』7, 95-113.
- 池田裕・三好理英子・浅井尚子・章突 (2000) 「中国人日本語学習者の言語行動－日本語と中国語における依頼－」『多摩留学生センター教育研究論集』2, 27-37.
- 藤森弘子 (1996) 「関係修復の観点から見た「断り」の意味内容－日本語母語話者と中国人日本語学習者の比較－」『大阪大学言語文化学』5, 5-17.
- 南不二男 (1972) 「日常会話の構造－とくにその単位について－」『言語』1:2, 108-115. 大修館書店
- 南不二男 (1981) 「日常会話の話題の推移－松江テキストを資料として－」(藤原与一先生古希記念論集)『方言学論集』I, 三省堂
- メグリアングライ ポンティパー (2013) 「携帯メールにおける断りの機能の構成－タイ人日本語学習者と日本語母語話者を比較して－」『言語文化と日本語教育』(45), 11-17.
- 柳慧政 (2012) 『依頼談話の日韓対照研究－談話の構造・ストラテジーの観点から－』笠間書院
- Brown, Penelope & Stephen C. Levinson. (1987). *Politeness: Some Universals in Language Usage*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Schegloff, Emanuel A. (2007). *A primer for conversation analysis: Sequence organization in Interaction*, Cambridge: Cambridge University Press.

話題の切り出しから「誘い」の意志決定に至るまでの一連の言語行動

Bateson, Gregory and Mary Catherine Bateson (1987) *Angels fear: Toward an epistemology of the sacred*. New York: John Brockman Assos, Inc. グレゴリー・ベイトソン, メアリー・ベイトソン (1988) 『天使のおそれ一聖なるもののエピステモロジー』東京清水社, 星川淳・吉福伸逸訳

Endnotes

- (1) ザトラウスキー (1993) は相手と行動をともにするための誘いとしての「勧誘」とセールスのように相手にある行動をさせる場合を合わせて「勧誘」と定義づけている。本研究では「セールス」のような行動は分析対象としないため、「誘い」に統一する。なお、先行研究で「勧誘」という言葉で用いられたものに関しては、著者の意思を尊重し、そのまま引用することにする。
- (2) 中国東北部の一都市であり、北京語を標準語とする。